

# 古代エジプトの式文

## 「ヘテプーディー・ネスウ」と王権観

木 下 理 恵

### I 序

古代エジプトでは、あの世とこの世との間に明確な一線を画していなかったため、非常に早期から、死者に食料その他の生活必需品を供することが広く行われていた。この需要を満たす場が、墓内の礼拝室で執り行われる供物の儀式であり、死者の息子あるいは、その代理を務めるカハ神官の手で、供物が捧げられた。また、古代では、呪文の朗唱が、実際の行為と同じ効力を有すると考えられていたので、供物の儀式においても、ヘテプーディー・ネスウ (*Htp-dj-nsw*) 「王が与える供物」の決まり文句で始まる式文が唱されたのである。更に、その呪力を、より強力で、半永久的なものとするために、その式文は、葬祭的性格の遺物 (供養碑、供物台、棺、彫像等) に、ほぼ古代エジプト全史を通じて盛んに記されている。

本稿にて取り上げるこのヘテプーディー・ネスウの式文の最大の論争点は、古代エジプト史三千年の流れの中で、極めて微少なながらであるが、その型に言語学上の変化が認められるため、この変化を如何にとらえ、解釈するかという点にある。

この問題に関しては、種々の説があるが、代表的な見解として、A. H. Gardiner, W. Barta の説を挙げておこう。まず、A. H. Gardiner は、古王国時代と中王国時代の間に<sup>①</sup>見られる文法上<sup>②</sup>の変化を重視して、それぞれの時代を考慮した解釈を下しており、G. Lapp, R. J. Leprohon らにより広く支持されている。一方、W. Barta は、全時代の証例を年代順に配列することにより、古王国時代から古代エジプト史の終わりまで、ヘテプーディー・ネスウが、実際には変化していないとする説を提唱している。一般に、前者の説が有力であるものの、その説は後で見ると、若干の問題点をはらんでいる。また先学の研究が証するように、言語学面のみから、この問題を取り扱っても堂々巡りに終わるだけで、明解な解答は得られない。そこで筆者は、本稿において、別の観点からのアプローチを試みたいと思うのである。

最初に述べたように、供物の儀式の執行者は、死者の息子であった。また、墓の装備や葬祭儀式の執行は、死者が生前に財産の一部から取っておいた葬祭

基金<sup>⑥</sup>によって維持されたのである。要するに、供物の儀式は、死者と儀式執行者以外の介入は見られないのである。では何故、民間の供物の儀式で唱えられる式文に、ヘテプーディーネスウ「王が与える供物」という、王が儀式を執り行うかのような印象を与える冒頭句が出現するのか。

それに対する解答は、式文の起源にまで溯らねばならない。この式文は、元来、現王が故王のために行う供物の儀式においてだけ使用されていたものであったが、徐々に民間で模倣されるようになったのである<sup>⑦</sup>。つまり、ヘテプーディーネスウ「王が与える供物」とは、王が故王へ供物をなす儀式過程を表現する句であった。しかし、その式文が民間で使用されるようになった時、辻褄が合わなくなったため、元来の意味は失われ、極めて観念的な文句つまり王権観を表明するものへと変容したのである。また理論的に、式文とは、各民族の宗教的世界観を表すものである。王が世界存続の鍵を担い、王を世界の支柱と考えた古代エジプトでは、世界観は王権観に等しく、この点からも、ヘテプーディーネスウの式文に、古代エジプト人の王権観を見ることは、正当と考える<sup>⑧</sup>。

古代エジプトの場合、全史を通じて神王理念が貫かれていることは事実であるが、三千年の歴史がある以上、古代エジプト人の王権認識も各時代によって相当ずれがあったはずである。式文は、古来より定型化したものであるため、型に大きな変化は見られないが、社会変動によって世界観が一変すると、その影響で、大幅な意味の修正が施されていくものである。ヘテプーディーネスウの句にも、三千年の歴史過程において、わずかながら、言語学上の変化が認められる。それは微々たるゆるやかな変化ではあるが、その変化の要因は、時代の移り変わりの中で生じる新しい王権観に他ならない。

全時代を通じて、ヘテプーディーネスウの式文は、三つの構成要素——a 王の決まり文句(*Htp-dj-nsw*)と神の決まり文句(*Htp dj*-神あるいは神名のみ)、b 願いごとの言及、c 死者の称号、名前<sup>⑨</sup>の明示——から成る。本稿では、この中でも、最も研究が盛んで、先の点から興味深く思われるaの王・神の決まり文句部分を対象に検討を試みる。

王・神の決まり文句部分の文法的变化<sup>⑩</sup>に関しては、次の二時代が問題となる。一つは、王・神の決まり文句部分のすぐ後に、新表現 *dj・f* が挿入される中王国時代。もう一つは、王の決まり文句との間に与格の前置詞 *n* が挿入される末期王朝時代である。(p.24の年表の決まり文句の変遷部分を参照。)しかし当時の王権観を詳細に吟味する必要性から、どちらかに時代を限定せざるをえない。そこで、筆者は中王国時代の変化を取り上げ、前代の古王国時代との比較によって、その間に相違がみられることを浮き彫りにしたい。

以下、Ⅱ章では、まず古王国時代から中王国時代の王権観の変化を文学作品を援用しつつ概観してみたい。そしてⅢ章では、古王国時代と中王国時代の式

文に、各時代の王権観を念頭において解釈を施してみた。なお、この章での両式文の訳には、最も広く受け入れられている A. H. Gardiner 説を採用している。しかし、A. H. Gardiner は、言語学者であるため、文法に囚われすぎ、古代エジプト人の思考様式の特徴を見落としているのである。筆者は王権観より式文にアプローチして、中王国時代の式文には、もう一つの解釈が可能であるという結論を得ている。それをIV章にて検討し、古王国時代と中王国時代の間で、神々の中での王の位置づけが変化していることを論述してみたい。

最後になったが、本稿での重要な定義を一つ述べておく。ここで言うところの王とは、式文が記された各遺物の所有者が、生きている間に在位していた王（おそらく複数にわたる）のことである。また、故王オシリス神に関しては、歴代の王たちの総体として受けとめている。

## II 古代エジプトの王権観

古代エジプト人の世界は、天・地・冥界の三界から成る。かれら古代人は、人間とその社会を、これら自然界に埋没した組織の一部と感じていた。<sup>⑮</sup>このような、すべてが互いに関連し合う全体の中で、王権は、自然を支配する様々な力（すなわち神）と人間社会との友好的な関係を確保し、自然と人間の調和ある秩序を維持する役割を担ったのである。<sup>⑯</sup>

古代オリエントのもう一つの偉大な文明地メソポタミアも同様の立場に立った王権を基礎に成立していたが、環境の相違から、その王権の性質はかなり異なったものであった。つまりメソポタミアでは、王の力をもってしては制御しきれないほどの猛威を振う自然の力の故に、王は神ではなく、「偉大な人」であった。<sup>⑰</sup>

それに対して、エジプトの自然は、いたって穏やかで、ナイルの氾濫も毎年定期的に起こり、安定した秩序を保っていた。そのため、自然と社会の安定した秩序を常に維持し続ける王の力は極めて強大なものとして感じられていたのである。古代エジプトは、あらゆる側面において、「神王」の存在を抜きにしては語ることができない。

この神王理念は、王朝時代を通じて不変の要素として保持されたが、古代エジプトが歴史社会である以上、その現実への適用においては、かなりの時代差が認められる。この章では、古王国時代から中王国時代までの王権観の変遷過程を同時代の文学作品の記述を軸に、概観してみたい。

ナルメル王の上・下エジプト統一、初期王朝時代の諸々の国家統制事業を経た古王国時代は、政治・経済・社会・宗教・文化のあらゆる分野が王によって

動かされ、王によって規制される高度に発達した中央集権制が確立され、神王理念が最も貫徹していた時代であった。

神王は、その神性の故に、人間の中で、唯一人、無条件で永遠の生命を享受できる存在であった。この世で、ホルスの化身あるいはラーの息子として、国土を統治した王は、死後、太陽（ラー神）やオシリス神となって、あの世でも支配を続けるのである。つまり王以外の人間は、この世でも、あの世でも、ただ王の恩恵・保護を通して、その生存に与ることができたのである。古代エジプトでは、来世は現世の写しと解されたため、王が、あの世でも調和ある秩序を維持し、死者を保護すると考えられたのは自然なことであろう。そのことは、この世の宮廷を思わせる配置で、王墓を取り囲んでいる臣下の墓からも窺える。全てが、神王を中心に回転している社会だったのである。

ところが、古王国の末頃から、王権は徐々に衰退し始める。それと共に貴族階層は、地方分権化の様相を呈するようになり、徐々に王墓付近ではなく、自分達の管轄している州に墓を造営するようになる。このような状況から、貴族階層が、あの世で、王の保護を介さずとも、神に祈ることによって永生を確保しようとする思想が生じてきていることが窺われるのである。

地方分権化の傾向の進展、それに続く社会革命によって引き起こされた古王国の崩壊は、永遠不動と遍く信じられていた秩序を打ち砕いた。裕富な者と貧しい者の立場は逆転し、暴力・掠奪・殺戮が国中に充満する。その中で、州知事の末裔である州侯達が、各地に割拠、国土は分裂状態を呈する。この古代エジプト史上、第一中間期と呼ばれる時代は、約350年に及ぶ内部混乱の時代であり、神王の権威は完全に失墜する。一時期ではあるが、民衆によって、王権が廃されるという異例の事態も生じたようである。

「見よ、かつて起こったことのない事態が生じている。王が民衆によって廃されたのだ。見よ、ホルスとして埋葬された者(=王)が、棺台から投げ出されており、ピラミッドの隠していたものは、空にされた。見よ、二つの国の平和を維持するラーの聖蛇王冠に人々が背くまでに至っている。見よ、少数の政治も知らないものたちによって、国土から王権が奪われてしまっているのだ。見よ、その境界の知られることのなかった国の秘密が<sup>⑨</sup>あばかれている。王都は一瞬にして破壊されてしまった。」(『イブエルの訓戒』7.1-4)

このような混乱状態にあっては、古王国時代に受け入れられた伝統や宗教思想も問い直されるようになる。一時は楽天的な古代エジプト人には相応しからぬ厭世思想も蔓延するが、裏を返せば、この社会不安に直面することによって、人々は初めて従来の枠を越え、新しい価値感・世界観を模索し始めたのである。殊に神王理念の崩壊によって、王もまた人間的に誤り易く、迷いをもつ

者として認識され、古王国時代のような輝しいまでの神性は認められなくなる。それどころか、描かれているのは、全知全能の王とは似ても似つかぬ姿である。

「今日、『臆病者』が何百万人も人間を支配している。人々は、国土の敵に対してなす術を知らず、むしろ眼前の暴動、神殿への侵入、墳墓に対する冒瀆を堪え忍ぶ。かれ(=王)は、もたらされた荒廃を見て皆の前で涙を流す。」(『イプエルの訓戒』12.7—8)

また王も人間であるため誤りを犯す存在であることが、公然と認められている。

「エジプトは墓地においても戦うと。だが衝動の赴くままに墓を破壊してはならぬ。余も同じ蛮行を犯したが故に、神の掟を踏みにじった者と同じことが起こったのだ。」(『メリカラー王への教訓』69—71)

古王国時代では、神たる王の行いは、正義以外の何物でもなかった。しかし、王は今や誤りなき絶対的な存在者ではありえない。けれども、王は自然と国家の秩序を維持するという世界存続のための重大な責務を担うため誤りは許されないのである。そこで、この時代より、王には正義の遂行が最も重要な義務の一つとして課せられるようになる。良き行いは、神に対してだけでなく、国家・全人類のためにも、なされねばならないのである。

「地上におる限り、正義を遂行すべし。涙流すものを宥め、未亡人を虐げず、誰もその父の財産から押しのけず、いかなる役人もその地位から退けるな。不正に罰することのないように心せよ。殺してはならぬ。汝に何も益するところがないからだ。鞭打ちと拘禁とで罰せよ。かくしてこの国は固まろう。」(『メリカラー王への教訓』47—9)

「邪悪であるな。忍耐はよいものだ。汝の愛によって、汝の記念碑を永遠なものにせよ。そうすれば、神は汝に報いることによって、讃え称せられよう。」(同教訓36—7)

もはや王でさえ、このような正義を遂行しないことには、永生の権利が与えられないのである。そのため、王は国家のために奉仕する良き羊飼いたる王権観が生まれることとなる。

「創造主が、かれ(=王)に監督を委ねた全人類を油断なく見張る良き羊飼いである。」(Dünichen, *Hist. Inschr.* II. 39,25)

このような王を人間化した王権観並びに社会混乱がもたらした貧富の逆転は、次のような人間平等思想を生み出した。

「余(=創造神)は、地平線の門のうちに四つの良き業をなした。余は万人がその時代を呼吸できるように四つの風をつくった。これが、そのう

ちの一つである。余は貧しき者が大いなる者と同じ力を持つように、豊かな増水をつくった。これが、そのうちの一つである。余は万人を、その同朋と同じようにつくった。かれらに悪事をなせとは命じなかった。余の言葉に背いたのは、彼らの心であった。これが、そのうちの一つである。余は州の神々に供物が供えられるように、かれらの心が西方を忘れることのないようにした。これが、そのうちの一つである。」(Coffin Text 第1130章)

創造神が、すべての人間を平等に作ったことを明示している上記の文章は、この時代のコフィン・テキスト(棺に書かれた呪文集)の一節である。棺に書かれていることから分かるように、この万人平等思想が、確立されたのは、専ら来世においてであった。すなわち、王もまた人間であり、無条件に永生が保証される存在ではないとする思想が生まれたことにより、あの世で、王の保護があてにならないと悟った人々は、王の代わりに、その時代の世相に適合して、民間に普及した死者の神オシリス神を信仰するようになる。そして身分や地位、財ではなく、現世で良き行いをすることが、永生を得る条件となった結果、全階層の人間が、あの世で、神オシリスに交容しうる機会を所有するようになったのである。古王国時代では、王のみが永生を保証され、それ以外の者は、王の恩恵に依存していたが、今や王と人民との間に存在していた永遠の生命の質的相違は消滅したのである。とはいえ、人々が、王の代わりに、保護を求めた神が、神王理念崩壊の時代にあっても、やはり、故王の属性を有するオシリス神であったという事実は、従来の王権観に対する思い入れの深さを感じさせるのではなかろうか。

第一中間期の混乱状態は、テーベの州侯の勃興によって終止符を打たれる。古代エジプトの第二の繁栄期、中王国時代の到来である。中王国時代前半は、依然、州侯階層の勢力が強大で、一種の封建状態を呈しているものの、強力な王権の出現は、再び神王理念を復活させることとなった。だが、中王国時代を通じて、第一中間期に形成された新王権観も神王理念と相並んで存続する。要するに、新しい観念が生じて、旧い観念を決して捨てることなく、たとえ新・旧の観念が相矛盾するものであったとしても、それら複数の観念を同時に容認するのが古代エジプト人の思考法の特色なのである。王は全知全能である(神王理念)が、正義も遂行(新王権観)せねばならない。また、臣下に畏怖の念を鼓吹する(神としての尊厳)だけでなく、寛慈(良き羊飼い)でなければならない。王は「悪疫の年のセクメト(の恐怖)のように、その恐怖を諸国にひろげ<sup>(21)</sup>る」(『シヌへの物語』B.45)ばかりでなく、「仁慈の主にして、優しさに富み、愛によって征服<sup>(22)</sup>」(同物語B.66)せねばならないのである。

中王国時代を通じて、このような両王権観が存続するが、州侯が割拠し、王権の基盤の弱い前半期では、殊に新王権観が強く感じられていたであろう。そ

のことは、暗殺された第12王朝初代のアメンムハト一世が現王に教訓を授けている作品から分かる。

「神として現われた汝よ。私の言うところに耳を傾けよ。汝が国土の王であり、河岸を支配するために。汝が善きことを豊かに成就するために。(なかでも)臣下の前では注意せよ。(かれらは)無にひとしいものであり、その尊敬など心にかける必要はない。唯一人で、かれらに近づいてはならぬ。兄弟を信頼するな。友人を知るな。腹心をつくるな。なんにもならぬからだ。眠るときも、みずからその心臓を守れ。禍いの日には、誰にも味方はいないのだから。余は、貧しき者に施しをし、孤児を養った。何ももたぬ者をも、何かをもっている者と同じように取りたててやった。だが余の食物を食べたものが、軍をおこした。余が腕を与えたものが、それによって恐怖をつくりだした。余の亜麻布をまとったものが、余を草(であるかのように)にみなした。」(『アメンムハト一世の教訓』1.2—6)

全知全能の神でありながら、人間的な苦悩を抱く王の姿がよく表現されている。

一方、中王国時代の後半においては、代々の王の努力が結実、州侯階層は姿を消し、国土は最大の繁栄を迎える。神王理念がより強固に確立された時期である。それは、『センウセルト三世讃歌』からも窺える。

「汝へ喝采。カカウラー、われらがホルス、ネチェリケペルーよ。国土を保護し、その国境を広げ、その王冠により異国を征服するもの。その両腕の働きもて、両国を包み、その両肩の働きもて〔異国を……する〕もの。棒を振うことなく夷人を殺し、弦を張ることなく、矢を射るもの。かれへの恐怖は、自分の国にある部族民どもをも、うち、かれへの畏怖は「九つの弓」を殺す。かれへの怖れは、幾千もの夷を死なしめ、かれの国境に達し(ようとするものどもを)〔……〕。セクメトのなすが如くに矢を射るもの。かれの力を知らざ〔る者〕を幾千となく打ち倒す。」(『センウセルト三世讃歌』1.1—7)

以上のように、古代エジプト人の思想を根底から変えた第一中間期を介することにより、古王国時代と中王国時代の王権観には、明瞭な相違が生じているのである。

もう一度繰り返せば、古王国時代は、王を全知全能の神とする神王理念が貫かれている。片や、中王国時代は、第一中間期に形成された国家にも神にも正義を遂行せねばならない良き羊飼いたる王権観と、伝統的イデオロギーたる神王理念とが入り混じっているのである。筆者は、ヘテプーディーネスウの式文には、今述べた王権観が反映されていると考える。つまり、古王国時代の式文

には、神王理念、中王国時代の式文には、新王権観と神王理念が読みとれるのである。

### Ⅲ ヘテブ-ディ-ネスウと新王権観

最初に、Ⅲ章・Ⅳ章の要旨を簡単に述べておく(表1を参照)。以下において、その特徴を見ていくが、まず古王国時代に典型的な式文を旧型とし、中王国時代から見られる新表現を含む式文を新型と呼ぶことにする。旧型の式文は、古王国時代に貫徹していた神王理念を表しているが、時代の流れと共に徐々に減少し、中王国時代半ばで、消滅する。反対に、第一中間期の新王権観の産物として中王国時代より生じる新型の式文は、徐々にその数を増し、第13王朝時代には、百パーセントを占めるに至っている。

しかしながら、前章の『センウセルト三世讃歌』からも窺えるように、中王国時代において、神王理念が、より強固となるのは、後半頃である。それなのに、この時点で、神王理念を表す旧型の式文が無くなるのは、奇妙なことである。そこで、筆者は、型としては、新型が流行し、圧倒的にその数を増していくが、その際、新型の式文に旧型の式文の思想が吸収されたのではないかと考える。つまり、新型の式文に、新王権観と神王理念とを考慮した二通りの解釈を施そうとする試みである。一つの式文に、二つの観念が共存することを、古代エジプト人は、決して、矛盾に思いはしなかったろう。あるいは、時代や階層により、どちらかの思想が、より強く感じられたかもしれないが。(神王理念の強固な新王国時代であれば、式文にも、神王理念の解釈を下すことが多かったろう。)

Ⅲ章では、新型の式文を生み出した新王権観より検討し、Ⅳ章では、神王理念からの解釈を試みたい。

#### (1) 旧型と新型の式文の比較

本章では、新型の式文に、新王権観から解釈を施す。

旧型と新型の式文が、それぞれどのようなものであるか、その特色を鮮明にするために、両時代の解釈、文法上の相違点を検討してみよう。

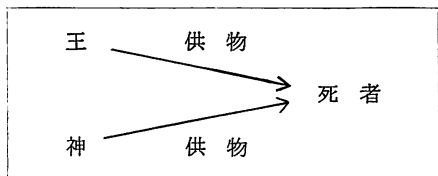
まず、典型的な旧型の式文を例示してみる。

(*Htp-dj-<sup>a</sup>nsw htp-[dj]-Inpw hnty sh-ntr tpy dw·f prt n·f hrw m hb nb rc nb Pth-šps<sup>a</sup>*)

「王<sup>a</sup>が与える供物。神の宮の前におわす者であり、かれの山の上におわす者であるアヌビス神が与える供物。すべての祭にて、毎日、かれに対して声に出す供物<sup>a</sup>がなされますように。プタハシェプセス(死者の名前)。」(Saqq. Mast. 28)  
(ヒエログリフと、訳の下線aは対応)



上の訳では、王と神とが、共に、死者に供物を与えるという下図の関係が成立する。



これは、あの世で、王と神の両方が恩恵の贈与者として認識されていた思想の現れと言えよう。とはいえ、アヌビス神をはじめ、オシリス神、ゲブ神のような冥界と関連した少数の神々が、王と共に恩恵の贈与者として祈り願われているが、実際には、すべてのあの世での贈物や特権は、王によって与えられると思われていたことが<sup>⑦</sup>、式文の検証から分かる。死者が、神や王に対して与えてくれるように祈願しているものは、供物以外に、あの世での保護や許可・力・良き埋葬等がある。神の決まり文句部に登場する神は、この恩恵の種類により、ある程度、限定されていることが、N. de G. Davies と A. H. Gardiner の研究から分かる。例えば、「埋葬儀式の執行」であれば、アヌビス神が関与するが多い。また、「死者のあの世での運命」に関して影響を与えるのはオシリス神である。それに対して、王は一定の種類の恩恵に限定されず、全種類の恩恵の与え手であることが、両人の研究からも窺われよう。つまり、この式文にも、現世同様、来世でも、家臣たちに強大な影響を及ぼす神王理念が見られるのである。

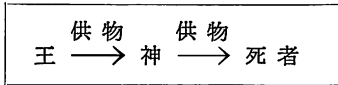
「神が与える供物」は、式文で、よく省略されるが、「王が与える供物」の省略は、ありえない。また式文の順序は、決まって、「王が与える供物。神が与える供物。」と神よりも王が先に祈り願われている。このような現象から、古代エジプト人には、はるか遠くにいる神々よりも、現人神として現前する王こそが、最大の保護者、神々の第一人者として感じられたことが分かるのである。

今度は新型の式文に目を転じてみよう。

(*Htp-dj-nsw Wsjr nb Ddw ntr c3 nb 3bdw dj-f prt-hrw t hnkt k3w 3pdw is*  
<sup>a</sup> *mn ktnbt nfr(i) wcb(i) cnht ntr jm n k3 n jm3hy Sn-wsr m3c-hrw*)<sup>⑧</sup>

「プシリスの主であり、大神であり、アビドスの主であるオシリス神に対して、王が与える供物。(それから)<sup>a</sup>かれが、声に出す供物であるパン、ビール、牡牛、鳥、アラバスター、布、すべての良き清きそれにて神が生きるものを、尊敬されし者、声正しきセンウセルトのカァに対して、与えてくれますように。」  
 (B. M. reg. no. 198) (ヒエログリフと、訳の下線 a・b は対応)

この訳では、まず、供物は王から神へ捧げられる。それから神は、その供物を死者へ与えるという図式が成り立つ。



要するに、旧型では、王と神が死者に供物を与えたのに対して、ここで、王が供物を捧げるのは、神殿にいる神なのである。そしてその神が、あの世で、死者たちに供物を分け与えてくれるとする解釈である。これは、第一中間期の王権の失墜、オシリス信仰による来世万人平等思想の影響を受けている。つまり、権威の低下した王は、あの世で死者たちに冥福を与えてくれるよう、神に対して供物を捧げる存在になってしまった。片や、来世での王となった死者の神オシリス神は、あの世で万人に、その供物を等しく分け与えてやるのである。このことは、神の決まり文句部に出現する神名が、圧倒的にオシリス神であること、この時代の式文の願いごとの部分に、「オシリス神の供物台に出てくるものが(与えられますように。)」<sup>⑨</sup>というような表現が、しばしば出てくることから言えよう。第一中間期の世界観に合致して、ここにも、王と神との地位の逆転が見られるのである。

以上、両式文を王権観の変質から解釈してみたが、そのように解釈する理由は、次のような二点の文法上の変化を考慮してのことである。

1. aの神の決まり文句部分

旧型……*Htp-dj-nsu htp-[dj]*-神

「王が与える供物。神が与える供物。」

新型……*Htp-dj-nsu* 神

「王が神に対して与える供物。」

つまり、新型には、神の決まり文句部分に *htp-dj* 「与える供物」<sup>⑩</sup>の表現が無い。このような現象は、古王国末頃から生じてくる。なお、新型の訳において、神を与格にとるには、*Htp-dj-nsu* と神名との間に、前置詞 *n* (英語では *to* に相当) が挿入されなければならないが、大部分の式文には見られない。この点が、この解釈の言語学上のウィーク・ポイントであるため、その補強を第二節で試みたい。

2. b部の新型にのみ見られる新表現

三つのバリエーション

*dj•f* 「かれが(死者に供物を)与える。」

*dj•s* 「かの女が……与える。」

*dj•sn* 「かれらが……与える。」

新表現の「かれ」「かの女」「かれら」という代名詞は誰を指しているのか。

王か、神か、あるいは王と神の両方なのか。新型の式文の解釈に種々の説が入り乱れる原因は、主に、この点にある。筆者は、先にも述べた通り、新型の式文には、新王権観と神王理念の両方が流れていると考えるため、b部に、二つの解釈を下している。まず本章では新王権観<sup>⑧</sup>より、この代名詞を神にとる。というのも、A. H. Gardiner の指摘する通り、これらの代名詞は、前に出てくる神の性数に合わせて以下のように変化するからである。

(Htp-dj-nsw Wsjr……dj·f) 「王がオシリス神(男神)に与える供物。かれが(死者に供物を)与える。」(Hier. Texts. II, pl. 29)

(Htp-dj-nsw Ht·hr……dj·sn) 「王がハトホル神(女神)に与える供物。かの女が……与える。」(Hier. Texts. VIII, pl. 21)

(Htp-dj-nsw Wsjr Wp·w3wt……dj·sn) 「王がオシリス神とウプウウト神(複数神)に与える供物。かれらが……与える。」(Hier. Texts. III, pl. 49)

このような例は、神のみが、あの世での恩恵者と解されていたことを裏づけていよう。しかしながら、上の指摘には当てはまらない例外もかなり見られるのである。例えば、前に出てくる神が複数であるのに、「かれ」でとられている例は、誤りでは済まされない程多い。反対に、オシリス神だけが祈り願われているのに、「かれら」と記されている場合もある。このことから、筆者は、この代名詞に、もう一方で、神王理念を考慮して、王と神の両方の行為を見ようとするものである。この詳細は、次章で行う。

以上のように、旧型と新型の式文の大きな相違点は、b部の出現にあり、それを如何にとらえるかという点が問題なのである。表2から分かるように、b部は第12王朝時代から現われる表現である。そのため、A. H. Gardiner は、式文の変化の原因を中王国時代に生じた慣習の影響と考えているが、型の変わりにくい性質の式文を変化させるほどの要因は、新しい世界観の形成、すなわち第一中間期の新王権観の出現以外には考えられないのである。ある時期に形成された思想が、文字や芸術のような目に見える形をとるのに、ある程度、時間を要するのが、古代エジプト文化の特色である。よって、式文に変化が現われるのは、第12王朝時代からではあるが、それは、第一中間期に生じた新王権観の産物に他ならない。

## (2) 累積証拠による補強

ここでは、前節にて指摘した新型の式文に対する解釈の文法上の弱点——王から神へ供物が渡るために必要な与格の前置詞 *n* 「——に対して」の欠如——を累積証拠により補強したい。

*Htp-dj-nsu* と神名との間に与格の前置詞 *n* が挿入されている例は、中王国時代には一例も見られない。さらに、第二中間期、新王国時代にも、式文の冒頭部分として登場する *Htp-dj-nsu* に、それは見られないのである。*n* が挿入されるようになるのは、はるかに時代を下った末期王朝時代以降<sup>⑧</sup> のことであり、殊にプトレマイオス朝時代に頻繁となる(年表参照)。中王国時代より、約一千年以上も期間が空いて出現するこの *n* を如何に評価すべきか。古代エジプトの歴史は、静的である。ある時期に思想上の変化が起こっても、目に見える形をとって出てくるのは、一時代かもう一時代、ずれるのが特色である。しかし、それを考慮した場合でも、*n* の挿入は、あまりに遅すぎないだろうか。

また、末期王朝時代は、宗教儀式等、時代と共に元来の意味が失われてしまっていたのに対して、その当時の世界観に合致するよう、かなりの変革が加えられた時代なのである<sup>⑨</sup>。そのため、式文に挿入された前置詞 *n* もその当時の文芸復興によって再解釈された可能性が高いように思われる。中王国時代の思想の流れをくんでいると考えるのは、かなり無理があろう。

従って、*n* 以外で、*Htp-dj-nsu* と神名との間に挿入されている語がないか、またそれらが与格の前置詞と解せるかどうかを検討してみたい。

全時代の式文の中で、古王国時代から中王国時代に数種の挿入例が認められる。以下に列举してみる。

1. *in* 古王国時代～第一中間期 17例<sup>⑩</sup>
2. *i* 古王国時代～第一中間期 4例<sup>⑪</sup>
3. *n* 古王国時代 7例<sup>⑫</sup>
4. *hr* 中王国時代 5例

これらを、すべて検討してみた結果、与格の前置詞に相当するのは、中王国時代に出現する *hr* のみである。1. の *in* 及び 3. の *n* は時制を表す語ではないかと推察している。2. の *i* に関しては、今のところ結論らしきものは出ていないが、G. Lapp は、1. の *in* の省略形と見なしている<sup>⑬</sup>。しかし、これらの詳述は、かなり難解な言語学の領域に深入りすることになるので、本稿では割愛したい。

以下、与格の前置詞 *hr* の挿入されている 5 例を列举しておく。

(*Htp-dj-nsu hr ntr c3*)

「王が大神に対して与える供物。」(*Hier. Texts. I<sup>2</sup>, pl. 38[2]*)

(*Htp-dj-nsu hr Wsjr……dj·f*)

「王がオシリス神に対して与える供物。かれが……与える。」(*Hier. Texts.*

IV, pl. 33 及び *Dyroff / Portner, Grabstein, pl. 1[2]* 及び CG 23025 の 3 例が、同型)

(*Htp-dj-nsu hr Inpw*)

「王がアヌビス神に対して与える供物。」(CG 20752)

これら *hr* の挿入例は王→神へ供物が引き渡される有力な証拠となろう。

しかし、この前置詞の例証の数は極めて少ない。そこで、次に、王が神に対して与えるくだりを図像から検討してみよう。公式の図ではなく、一般人の供養碑(王の介在しない私的所有物)上に、王が神に供物を捧げている図は、3例見られる。

図像1では、上欄の船中で、右側の王のスタイルをした人物が、中央の鎮座したオシリス神、イシス神、船尾に止まった隼姿のホルス神に供物を捧げている。

また図像2では、中央にいる王が、左側のミイラ姿のオシリス神に供物を捧げている。また、王の後方に、二人の随人の姿が描かれているが、そのうち、王のすぐ後ろの人物が、この供養碑の所有者である。つまり、王が死者たちの冥福のために、神に供物を捧げている図柄と解せよう。

図像2と同じく、図像3の上欄でも、中央にいるトメス3世が、後方に控えている死者達のために、オシリス神に供物を捧げているのである。

これらの図像は、3例共、新王国時代のものである。古代エジプト文化は、ある時期に思想が形成されても、形になって現われるまでには、ある程度時間を要するという特色があるため、新王国時代の例でも、十分、証拠となることを確信している。

中王国時代には、王が神に対して供物を捧げる図は見られないが、これに類するものとして、図像4を挙げておこう。左側に人間の姿をしたミン神が描かれ、その前に供物台が置かれている。そして供物台の横に、「王が王の知人、歌手たちの長であるウルーネブ・ケムウイ(この供養碑の所有者の名前)のカエのために、ミン神に対して与える供物」と添え書きされている。従って王の姿こそ描かれていないが、ミン神の前に捧げられた供物は、死者に分け与えてくれることを意図して、王が神に捧げたものと言えるのではなからうか。<sup>④</sup>

これらは、現実には起こった場面の描写でもなければ、ただの装飾でもない。式文に施されていた思想、つまり王が死者たちの冥福を祈って神に供物を捧げるという国家・全人類のために正義を遂行する新王権観を表徴しているに違いない。

しかし、前置詞5例、図像4例では、極端に証例の数が少なすぎる。大部分の式文に、前置詞は挿入されていない。また図像として表現されている例も、これ以上は、見あたらないのである。何故であろうか。その理由として次のようなことが考えられる。つまり、式文には、型に変化がなくとも、時代と共に意味づけが修正されていくという性質がある。要するに、前置詞の挿入がなく

とも、その時代の世界観は、*Htp-dj-nsw Wsjr* の句に、「王がオシリス神に対して与える供物」の解釈をあてるのを自明のこととしたのである。それはどういうことか、以下、具体的に見ていこう。

本稿では、観念的にヘテプーディーネスウを見ることをテーマとしているが、そもそも式文というのは、儀式の進行過程を表わすものでもある。古代エジプトでは、社会のすべてが、王を祖型としている。民間の供物の儀式も、その例に違わず、息子である現王が、故王オシリス神に供物を捧げる儀式の模倣に他ならない。そのことは、先に引用した図像 1 と 3 に明瞭に示されている。上欄の王と神、下欄の息子と死者の配置の類似は、民間人が、王の儀式を、そのまま、まねていることを伝えている。従って、*Htp-dj-nsw Wsjr* 「王がオシリス神に対して与える供物」は、息子が、死してオシリス神となった父（中王国時代では、王だけでなく誰もがオシリス神になれた。詳しくは、II 章を参照）のために執り行う供物の儀式の行為を表すものとなったのである。新王権観に加えて、当時のオシリス信仰の普及によって形成された世界観からも、ヘテプーディーネスウに意味づけがなされたのであり、なおさら、王→神への供物が渡る解釈は成り立つと考える。だが、このように、「王がオシリス神に対して与える供物」の部分を儀式の行為と見なすと、供物は、息子→死者→死者へと渡る辻褃の合わない展開となってしまうが、論理的思考法の欠如が認められる古代エジプト人に、現代的観点から、その矛盾を追及するのは、的外れであろう。

また、最後に、第18王朝時代の興味深い一節を挙げておこう。

(*m htp-dj-nsw n ntrw m prt-hrw 3ḫ sch*)

「神々のために *htp-dj-nsw* の供物、祝福された死者のために *prt-hrw* の供物。」(*Urk. IV, 545 ; Hier. Texts. VIII, pl, 5*)

この文章では、2つの供物、*htp-dj-nsw* 「王が与える供物」と *prt-hrw* 「声に出す供物」とが対照的に記述されている。つまり、両方共、供物に相違ないのだが、受け取り手によって、供物の呼び名が変わることが、この文章から指摘できるのである。神に捧げられる供物は、*htp-dj-nsw* 「王が与える供物」、他方、死者に捧げられる供物は、*prt-hrw* 「声に出す供物」と呼ばれていることが分かつ<sup>⑧</sup>。このことから、式文の冒頭に登場する *Htp-dj-nsw* 「王が与える供物」は、前置詞の挿入こそないが、神に対して捧げられるのが、古代エジプト人の感覚上、当たり前のこととして受け止められていたと言えるのである。

以上の累積証拠から、新型の式文には、まず第一に、王→神→死者へと供物

が移される解釈を下すことができるのである。

#### IV ヘテブ-ディー-ネスウと神王理念

この章では、新型の式文に、神王理念の解釈が可能であることを示したい。つまり、古王国時代のように、王と神の両方が、あの世での恩恵の与え手であるとする解釈を、新型の式文に施そうとする試みである。式文を中王国時代の中でも、さらに細かく時代別に分類したり、階層別の分類を行えば、それによって各時代・各階層で抱かれていた王権観の相違も出てくるかもしれない。しかし、そのような検討は今後の課題として、ここでは、新型の式文に、王・神の両方が供物を与えたとする解釈が可能であることを例証により検討する。

さらに、古王国時代と同じく中王国時代にも、神王理念の解釈が可能であるけれども、式文のトータルな検証から、両時代の間で、神々の中での王の位置づけが変化していることを、合わせて指摘しておきたい。

もう一度、新型の式文を見てみよう。

(*Htp-dj-nsu Wsjr nb Ddw ntr c3 nb 3bdw dj.f prt-hrw*……以下略)

「ブリシスの主であり、大神であり、アビドスの主であるオシリス神に対して、王が与える供物。(それから)かれが<sup>g</sup>、声に出す供物を、(死者に)与えてくれますように。」

つまり、前章では、供物が王→神→死者へと移行すると試訳した。*dj.f*「かれが……与える」の部分の代名詞を神のみと見なしたのである。

しかし、同時に、この代名詞「かれ」を、王と神の両方、言い換えれば王にして神とも解し得るのである。つまり、「王が与える供物。オシリス神(が与える供物。)かれ(=王と神)が(死者に)供物を与えてくれますように。」と試訳することも可能である。

まず、旧型と新型がミックスしている型——神の決まり文句部分に、*hpt-dj*「与える供物」が付いており、なおかつ新表現がある——を見てみよう。これは、新型の中に、旧型の思想が流入していったことの証明となろう。

(*Htp-dj-nsu htp-dj-Wsjr Hnty Jmntyw ntr c3 nb 3bdw dj.f*……)

「王が与える供物。西方の第一人者であり、大神であり、アビドスの主であるオシリス神が与える供物。かれが<sup>g</sup>……与える。」(CG 20421)

(*Htp-dj-nsu htp-dj-Wsjr Hnty Jmntyw m 3bdw dj.f*……)

「王が与える供物。アビドスにおわす西方の第一人者であるオシリス神が与える供物。かれが<sup>g</sup>……与える。」(CG 20421)

これらの例は、王・神の決まり文句部分に、*htp-dj*「与える供物」がついていることから、明らかに、王と神が死者に供物を与えていると言える。では、何故、「かれら」ではなく、「かれ」として、とられているのか。

前章にて、新表現の代名詞は、前に出てくる神の性数に一致して、変化していることを指摘したが、これには、例外が、かなり見られることも事実である。例えば、複数の神が前置するのに、「かれ」で、とられている例が、間々見られる。そのごく一部を列举してみる。

(*Htp-dj-nsw Rc Gb dj·f·……*)

「王が与える供物。ラー神とゲブ神(が与える供物)。かれが……与える。」(*Hier. Texts. II, pl. 4*)

(*Htp-dj-nsw Wsjr nb Ddw ntr c3 nb 3bdw Wp. w3wt nb t3 dsr dj·f·……*)

「王が与える供物。ブリシスの主、大神、アビドスの主であるオシリス神と墓地の主であるウプワウト神(が与える供物)。かれが……与える。」(*CG 20191*)

(*Htp-dj-nsw Wsjr nb Ddw Inpw tpy dw·f jmy-wt nb t3 dsr dj·f·……*)

「王が与える供物。ブリシスの主であるオシリス神とかれの山の上におわす者であり、ミイラ作りの場の主であり、墓地の主であるアヌビス神(が与える供物)。かれが……与える。」(*P. A. Boeser, Beschreibung der ägyptischen Sammlung des Niederländischen Reichsmuseums der Altertümer in Leyden II, 1976, pl. 30*)

(*Htp-dj-nsw Inpw Hnmw Wp·w3wt dj·f·……*)

「王が与える供物。アヌビス神とクヌム神とウプワウト神(が与える供物)。かれが……与える。」(*Hier. Texts. IV, pl. 16*)

古代エジプトにおいて、ある部族が、他地域を征服すると、征服された地の神は、勝者の神と合体する現象が見られる。また、そのような争乱が起これなくとも、時と共に、平和的に、神々の融合は進む。それを考慮すると、複数の神々が単数でとられている例も、理解されようが、この「かれ」の中に、王を含めることは、できないだろうか。それに関して、第12王朝後半の高官セヘテップ・イブ・ラーの石碑(*CG 20538*)から、アメネムハト三世を讃美している興味深い部分を挙げておこう。<sup>④</sup>

「かれ(=王)は、人々の心臓にありし、知覚の神シアである。」

「かれ(=王)は、その光線によって見られる太陽神ラーである。」

「かれ(=王)は、人間を作りし神、全肢のクヌムである。」

「かれ(=王)は、二つの土地を守護する女神バステトである。」

「かれ(=王)は、その命令に背く者に対して(罰を課する)女神セクメトである。」



古代エジプトの王は、かれ自身が、神々の一人であった。それ故、他の神々と同様、王は様々に変容できる性質を備えていた。王は、仲間の神々と合一することができたし、男神、女神を問わず、神々のどれにもなることができたのである。<sup>⑧</sup> 従って、「かれ」という単数代名詞に、王と神の融合した姿を見ることが可能なのである。

上例には、神の決まり文句部分に、*hṭp-dj*「与える供物」の表現が見られないが、これらは、カリグラフィックの観点から、省略されているように思われる。その証拠として、同一の式文中の一部の神には、*hṭp-dj* があり、他の神には、それが見られない例を挙げておく。(下線部分が、*hṭp-dj*のない部分である。)

(*Hṭp-dj-nsw Wsjr hṭp-dj-Inpw*)

「王が与える供物。オシリス神。アヌビス神が与える供物。」(CG 20106)

(*Hṭp-dj-nsw hṭp-dj-Wsjr nb Ddw Hnty. Imntyw ntr c3 nb 3bdw Inpw tpy d̄w·f jmywt nb t3 d̄sr*)

「王が与える供物。ブリシスの主、西方の第一人者、大神、アビドスの主であるオシリス神が与える供物。かれの山の上におわす者、ミイラ作りの場の主、墓地の主であるアヌビス神。」(CG 20692)

(*Hṭp-dj-nsw hṭp-dj-Wsjr nb Ddw ntr c3 nb 3bdw Wp·w3wt Hkt Hnmw*)

「王が与える供物。ブシリスの主、大神、アビドスの主であるオシリス神が与える供物。ウプワウト神、ヘケト神、クヌム神。」(CG 20024)

これらの例は、*hṭp-dj* が字体配置の関係から、度々省略されたことを物語っている。

本論に帰ろう。今度は、反対に、前に登場する神が、一神であるのに、それを受ける代名詞が、「かれら」になっている例を挙げてみる。

(*Hṭp dj-nsw Wsjr nb Ddw ntr c3 nb 3bdw dj·sn……*)

「王が与える供物。ブシリスの主であり、大神であり、アビドスの主であるオシリス神 (が与える供物)。かれらが……与える。」(CG 20286)

(*Hṭp-dj-nsw Ht·hr hry tp·t(?) W3st dj·sn……*)

「王が与える供物。テーベの上におわすハトホル女神 (が与える供物)。かれらが……与える。」(Urk. IV, 17-19, 545)

このような例は、代名詞が、王と神の両方を指していることを暗示している。

また、中王国時代に、次のような例も見られる。

(*Htp-dj-nsw dj·f Wsjr ntr c3 nb 3bdw dj·f*)

「王が与える供物。かれが与える。大神であり、アビドスの主であるオシリス神（が与える供物）。かれが与える。」(CG 20068)

王、神の決まり文句部分それぞれの後に、*dj·f*「かれが与える」の挿入が見られ、これより、王と神の両方が、やはり死者に供物を与えると解されていたことが分かる。

(*Htp-dj-nsw dj·f*)

「王が与える供物。かれが与える。」(*Corpus Antiquitatum Aegyptiacarum Museum of Fine Arts, Boston II, Mainz, 1985, 28-12-264.*)

神名を介さず、*Htp-dj-nsw*「王が与える供物」のすぐ後に、*dj·f*「かれが与える」が接続する。この「かれ」は、間違いなく、王を指しており、中王国世代でも、王が供物の与え手として認識されていた証拠と言えよう。

このように、新型の式文にも、神王理念の読みとれることが分かったが、中王国時代の式文の検証からは、古王国時代のような王を神々の第一人者とする強大な王権観は見いだせない。この時代の王と神とは、同等の力を有する。あるいは、やや、王の方が劣っているように思われるのである。なぜなら、古王国時代には、よく省略された神の決まり文句部分が、省略されることは、殆んど無い。（先に例示した神の決まり文句が省略されている *Boston, 28-12-264* はまれな例外である。）それどころか、中王国時代では、王を圧するほど、多数の神々が祈り願われている。殊にオリシス神に対する信仰は大きい。オシリス神の元来の称号は、*ntr c3*「大神（故王の称号）」であったが、この頃より現王の称号である *ntr nfr*「良き神」が付加されるようになっていく。このことから、あの世において、オシリス神が、王の影響力を奪う形になったことが分かるのである。裏を返せば、この世とあの世とを類似したものとする古代エジプトでは、現世においても、王と神の地位の同等化、あるいは、神々の格がやや優位であったと言えないだろうか。しかし、最も祈り願われているオシリス神は、故王の属性を有している。他のどの神でもなく、オシリス神が、あの世の最高神に選ばれている事実は、古代エジプト人の従来の王権に対する思い入れの深さを感じさせるのである。

しかしながら、中王国時代において、王の地位は明らかに下がる。それは第一中間期に生じ、中王国時代を通じて継承される新王権観の影響に他ならない。殊に、後半期に、神王理念は貫徹し、後代まで、その神性と偉業が讃えら

れる王が出現するとはいえ、古王国時代に対比すれば、やはり王権の低下を感じざるをえないのである。

## V 結

ヘテプーディーネスウの式文は、古代エジプトの王権観の変質によって、その型、意味づけが修正されていく。

古王国時代では、式文からも、その当時、貫徹していた神王理念が読みとれ、なおかつ王が神々の第一人者として認識されていたことが分かった。それに対して、中王国時代の新型の式文には、新王権観と神王理念との二通りの解釈が可能であること、また、式文を古王国時代と比較検討した場合、同じく神王理念が継承されているとはいえ、中王国時代では、神々の中での王の地位が低下していることを指摘することが出来た。

古代エジプトでは、王権の果たした役割は大きい。人間社会と自然界との秩序を保つという世界存続の責務を担う王権は、古代エジプト人の隅々にまで、影響を与えた。だからこそ、王権観の変化も、あらゆる分野に明瞭に示される。

本稿では、ヘテプーディーネスウの式文という特殊なテーマを取り挙げたが、それらも、時代ごとの王権観の変化とともに変化していること、さらには、古代エジプト人が、王を、どの程度の神と見なしていたのか、その位置づけの変化までもが、証明されえたと思う。

## 注

- ① ヘテプーディーネスウの訳には、A. H. Gardiner 説「王が与える供物」の他に、K. Sethe 説「王よ、あわれみ給え」等、他々あるが、ここでは、そのような言語学上の論議に立ち入ることは避け、一般に受け入れられている A. H. Gardiner 説を採用している。
- ② Nina de G. Davies and Alan H. Gardiner, *The Tomb of Amenemhet*, (London, 1915), pp. 79-93. A. H. Gardiner, *Egyptian Grammar*, 3rd. ed. revised, (London, 1988), pp. 170-3.
- ③ G. Lapp, *Die Opferformel des Alten Reiches*, (Mainz, 1986). pp. 32-3.
- ④ R. J. Leprohon, The offering formula in the First Intermediate Period, *JEA* 76, 1990, pp. 163-4.
- ⑤ W. Barta, *Aufbau und Bedeutung der altägyptischen Opferformel*, (Glückstadt, 1968), pp. 261-70.
- ⑥ エジプト学の専門用語。基金といっても、現金の意味ではなく、葬祭用の需要を満たすために、用意された耕地のことを言う。
- ⑦ Nina de G. Davies and Alan. H. Gardiner, *op. cit.*, p. 87.
- ⑧ J. チェルニーによれば、ヘテプーディーネスウとは非常に古い時代に、墓や副葬品

の一部などが王の寵愛のしるしとして与えられた慣習を表す語であつたが<sup>2</sup>、その慣習が  
廃れると共に、元の意味は失われ、結局、死者に墓の用具や供物全般を与えてくれるよ  
う、神々に向けられる『祈り』以外の何物でもなくなった、としている。(J. チェルニ  
ー『エジプトの神々』ロッコウブックス、1988年、pp.111-2) このような、ヘテプ-デ  
ィ-ネスウに王権観を見ない説に対して、代わりに王冠を被った人物が供物を手にして  
いる組み合わせ文字が使用されている例 (*Urk. IV*, 46; E. Drioton, *ASAE* 44, 1940,  
p. 20 etc) は、王が<sup>3</sup>、観念上、供物の与え手として認識されていた事実を伝えている。

(Nina de G. Davies and A. H. Gardiner, *op. cit.*, p. 89)

⑨ 井門富二夫編『講座宗教学 3 秩序への挑戦』東京大学出版会、1978年、p. ii、脇本  
平也、柳川啓一編『現代宗教学 4 権威の構築と破壊』東京大学出版会、1992年。p. vi。

⑩ G. Lapp, *op. cit.*, p. ix.

⑪ 第二中間期時代に、句の中で文字の入れ変わり現象が見られるが<sup>4</sup>、これは、文法的変  
化ではなく、カリグラフィック上の変化と考えている。また、この変化の理由に関して  
は、今までのところ、解明されていない。この現象に関しては、P. C. Smither, *JEA*  
25, 1939, pp. 34-7 にて、取り扱われている。

⑫ H. Frankfort, *Kingship and the Gods*, (Chicago, 1948), p. 3.

⑬ *Ibid.*, p. 3.

⑭ *Ibid.*, p. 6.

⑮ J. B. Pritchard, *Ancient Near Eastern Texts - Relating to the Old Testament*,  
Third Edition with Supplement, (Princeton, 1969), p. 442. 杉勇、三笠宮崇仁編『古  
代オリエント集 筑摩世界大系 I』(筑摩書房 昭和53年), p. 457.

⑯ 屋形禎亮「イプエルの訓戒」『古代史講座 12 古代思想と芸術』学生社、昭和40年、  
pp. 31-2. 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、p. 524.

⑰ J. B. Pritchard, *op. cit.*, p. 416. 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、p. 523.

⑱ J. B. Pritchard, *op. cit.*, p. 415. 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、p. 520.

⑲ J. B. Pritchard, *op. cit.*, p. 415. 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、p. 521.

⑳ 屋形禎亮、前掲論文、p. 42.

㉑ J. B. Pritchard, *op. cit.*, p. 19. 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、pp. 407-8.

㉒ 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、p. 405.

㉓ J. H. Breasted, *A History of Egypt*, (London, 1906), p. 179. J. B. Pritchard,  
*op. cit.*, p. 418. 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、p. 528.

㉔ 杉勇、三笠宮崇仁編、前掲書、p. 625.

㉕ *Wb III*, p. 186 にて、*Htp-dj-nsw htp-dj*-神の表現は、第18王朝時代、サイス朝時  
(末期王朝時代のこと) にもあると指摘されているが、このような表現は、中王国時代  
以降は、全く見られない。

㉖ A. H. Gardiner, *op. cit.*, p. 171.

㉗ Nina de G. Davies and A. H. Gardiner, *op. cit.*, p. 83.

㉘ ここで、「王が与える供物」と訳すのは、やや無理がある。ヘテプという語には、「満  
足、恩恵、平和」等の意味があり、厳密に言えば、古王国時代では、「恩恵」をあてる

のが、最適である。だが、中王国時代の式文の訳との一致上、「供物」の訳をとることとする。

②⑨ Nina de G. Davies and A. H. Gardiner, *op. cit.*, pp.82-83.

③⑩ A. H. Gardiner, *op. cit.*, p.170.

③⑪ CG 20088; 20012; 20028 等に見られる。

③⑫ R. J. Leprohon, *op. cit.*, pp.163-4. G. Lapp, *op. cit.*, pp.32-3. Nina de G. Davies and A. H. Gardiner, *op. cit.*, p.88.

③⑬ A. H. Gardiner, *op. cit.*, p.171. Nina de G. Davies and A. H. Gardiner, *op. cit.*, pp.88-9.

③⑭ 毎日、あるいは祭日に、神殿に捧げられた莫大な供物のうち、少量だけ神官たちによって消費された後、契約関係にある私的な葬祭儀式の世話をする人々（死者の息子あるいはカァ神官）に分配され、それが私人の墓に供えられるという第12王朝時代より生じた慣習のことである。（A. H. Gardiner, *op. cit.*, p.172.）

③⑮ CG 23082; 23101; 23134 等に*n*の挿入が見られる。

③⑯ E. オットー『エジプト文化入門』ロココウブックス、平成4年、p.73.

③⑰ *jn* が挿入されている17例を、式文のパターンによって分類し、その例数を列挙しておく。

1. *Htp-dj-nsw jn* 願いごと Firth, Cecil M. and Buttscombe Gunn, *Teti Pyramid Cemeteries I* (以下 *TPCI* と略す) Le Cairo, 1926, p. 221(21); p. 223(33); p. 225(53)

3 例

2. *Htp-dj-nsw jn Jnpw* A. Varille, *La tomb de Ni-ankh-Pepi à Zâuyet el-Mayetin* MIFAO 70, 1938, (以下 *Varill, Ni-ankh-Pepi* と略す) pl. 17g  
*TPCI*, p. 219(4); p. 219(11); p. 220(12); p. 221(24);  
p. 222(29); p. 222(31); p. 223(39)

CG 1335

9 例

3. *Htp-dj-nsw jn Wsjr* *TPCI*, p. 223(45)  
*Varille, Ni-ankh-Pepi*, pl. 17c.

2 例

4. *Htp-dj-nsw jn htp-(dj)-Jnpw* *Varille, Ni-ankh-Pepi*, p.70(pl. 64B)

1 例

5. *Htp-dj-nsw jn(htp)-dj-Jnpw* H. Junker, *Giza VIII*, DAWW73, 1947, p. 169 (Abb. 88)

CG 57016

2 例

6. *Htp-dj-nsw in htp-dj Jnpw jn* CG 57025

1 例

1. の「*Htp-dj-nsw jn* 願いごと」のように、*jn* のうしろに神名が接続していない例、及び、4. 5. の「*Htp-dj nsw jn htp-dj-'Inpw*」のように、*jn* のうしろに「アヌビス神が与える供物」の句が続く例より与格の前置詞ではない。おそらく、この *jn* は、*sdm·jn·f* 形という時制の働きをする語であろう。

③⑧ *j* が挿入されている式文 4 例をパターンによって分類し、その例数を示しておく。

1. *Htp-dj-nsw j Inpw* CG 1395; 1500  
*Varille, Ni-ank-Pepi*, p. 25  
3 例
2. *Htp-dj-nsw j Wsjr* ASAE 9, 1908, p. 88  
1 例

*j* という前置詞はありえない。

③⑨ *n* が挿入されている式文 7 例を、パターンによって分類し、その例数を示しておく。

1. *Htp-dj-nsw n* 願いごと JNES 13, 1954, p. 260 [VIII]  
2 例
2. *Htp-dj-nsw n htp-dj-Inpw n* ASAE 40, 1940, p. 691 [Fig. 77]  
1 例
3. *Htp-dj-nsw n htp dj-Hnty. Jmntyw n* ASAE 40, 1940, p. 691 [Fig. 77]  
1 例
4. *Htp-dj-nsw n htp-dj-Inpw* JNES 13, 1954, p. 260 [VIII]  
1 例
5. *Htp-dj-nsw n htp-dj-Wsjr* JNES 13, 1954, p. 260 [VIII]  
1 例
6. *Htp-dj-nsw n ntrw nbw* S. Hassan, *Giza II*, Oxford-Cairo, 1930-31, p. 172 (fig. 205)  
1 例

1. の「*Htp-dj-nsw n* 願いごと」のように、*n* のすぐうしろに神名ではなく、願いごとがきている例、4. 5. の「*Htp-dj-nsw n htp-dj-'Inpw*」のように、目的語が「アヌビス神が与える供物」である例から、この *n* は与格の前置詞ではない。おそらく *sdm·n·f* 形という時制を表しているように思われる。J. A. Wilson も、古王国時代に出現するこの *n* を時制の働きをする語として、“An offering which the king has given” と訳している。(J. A. Wilson, JNES 13, 1954, p. 247)

④⑩ G. Lapp, *op. cit.*, p. 30.

④⑪ H. Ranke, *PNI*, (Glückstadt, 1935), p. 81.

④⑫ Nina de G. Davies and A. H. Gardiner, *op. cit.*, p. 89.

④⑬ *Ibid.*, p. 89.

④⑭ 訳出にあたり、J. H. Breasted, *Ancient Records of Egypt I*, (New York, 1905), p. 327. J. B. Pritchard, *op. cit.*, p. 431. を参照している。

④⑮ H. and H. A. Frankfort, John A. Wilson, Thorkild Jacobsen, *Before Philosophy - The Intellectual Adventure of Ancient Man*, (Chicago, 1954), p. 74.

④ *Ibid.*, p.74,

④ *CG* 20545;20604 等。 *Wb II*, p.362 でも、指摘されている。

年 表

	時 代	エジプト史概略	決まり文句の変遷
B.C.2780   2400頃 約400年	古 王 国    末	王を頂点とする中央集権 体制 強固な神王理念  王権衰退	<i>Htp-dj-nsw htp-dj-Inpw</i> 「王が与える供物。アヌビス 神が与える供物。」 <i>Htp-dj-nsw [htp-dj] Inpw</i> 「王が与える供物。アヌビス 神 (が与える供物。)」
B.C.2400   2065年 約350年	第一中間期	世相混乱 神王理念の失墜 新王権観の形成	頻繁に出現する神名がアヌビ ス神からオシリス神へ
B.C.2065   1785年 約300年	中 王 国	テーベ勃興, 政治安定へ 神王理念の復活 しかし新王権観も存続	<i>Htp-dj-nsw Wsjr dj·f</i> 「王がオシリス神に与える供 物。それからかれが与える。」
B.C.1785   1580年 約200年	第二中間期	王権弱体 ヒクソス支配	中王国時代の型のまま
B.C.1580   1085年 約500年	新 王 国   末	古代エジプトの黄金時代 ハトシェイプスト・ト トメス3世等強大な王 権 エジプト文化徐々に衰退	中王国時代の型を継承
B.C.1085   668年 約400年	第三中間期	混乱時代, これ以後すべ て外国出身のファラオが 立つ	中王国時代の型を継承
B.C. 664   332年 約300年	末 期 王 朝	リビア・ペルシア王によ る王朝復活 文芸復興時代	<i>Htp-dj-nsw n Wsjr dj·f</i> 「王がオシリス神に対して与 える供物。それからかれが与 える。」
B.C. 332   30年 約300年	プトレマイオス	アレクサンドロス大王の 征服 ギリシア・エジプト文 化の融合	<i>n</i> の挿入が頻繁

表 1

時代	王 権 観	旧 型 (神の決まり文句部 <i>htp-dj</i> あり) <i>dj·f</i> なし	新 型 (神の決まり文句部 <i>htp-dj</i> なし) <i>dj·f</i> あり
古 王 国	神王理念		
第 一 中 間 期	新王権観		新王権観の産物
中 王 国	神王理念 + 新王権観 神王理念強固		
第 二 中 間 期			

表 2

Period		旧 型 (新表現なし) <i>pri·hrw</i>	新 型 (新表現あり) <i>dj·f pri·hrw</i>	Total
12王朝	XIth Dynasty	14 100	0 0	14
	Sesostris I	11 42	15 58	26
	Ammenemes II	4 20	16 80	20
	Sesostris III	1 14	6 86	7
	Ammenemes III	1 5	19 95	20
13王朝	{ Later	0 0	8 100	8
合 計				95

C. J. C. Bennett, *JEA* 27, 1941, p.78.

この表は、王名表示により、製作年代が分かっている供養碑95枚から、統計をとったものである。

旧型、新型の2列の数値のうち、左側は新表現の有・無によって分けられた供養碑の枚数、右側は相対比較のパーセンテージである。



图像 1



*Hier. Texts V, pl.44. B. M.reg. no.214 (第18王朝)*



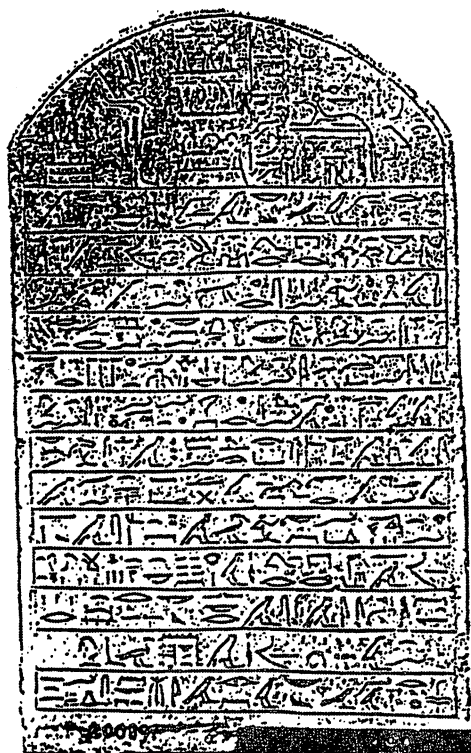
*Hier. Texts IV*, pl. 24. B. M. reg. no. 833 (第17王朝)

图像 3



CG 34023 (第18王朝)

図像 4



CG 20089 (中王国時代)

(関西大学卒業生)